

「超人的悪漢」から考える人間哲学

ド・ジョヴァンニ

Don Giovanni



DATA

作曲:ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト
(1787年制作)
初演:1787年10月29日 国民劇場(プラハ)
原作:スペインの「ドン・ファン伝説」による
設定:17世紀、スペイン
登場人物:ドン・ジョヴァンニ[Br]=貴族
レポレロ[Bs]=ドン・ジョヴァンニの従者
ドンナ・アンナ[S]=オッターヴィオの婚約者
ドン・オッターヴィオ[T]=ドン・ジョヴァンニの友人
ドンナ・エルヴィラ[S]=ドン・ジョヴァンニのかつての恋人
騎士長[Bs]=ドンナ・アンナの父 …ほか

歴史に残る「キング・オブ・女たらし」

淑女の皆さんに質問があります。皆さんは「女たらし」はお好きですか？

スミマセン。お好きなわけがありませんよね。失礼しました。

だいたい「女たらし」って言葉自体が、アウト・オブ・デートというか、オールドファッションな響きです。「ハンサム」が半分死語で「イケメン」が現代語だとすると、「女たらし」に相当する今風の呼び名は何でしょうか。……あまり上品な候補が思いつかないの

で、とりあえずここは「女たらし」で統一してみます。

これは……まことに困った種族です。自ら進んでそんなものの餌食になろうという女性がいたら、それはそれで問題と言えましょう。

女たらしの困ったところは、こっちをさんざん口説き落としておいて、モノになると光の速さで逃げてしまうところですよ。女のほうとて、むざむざわが身を安売りたいわけなし。「あんさんがそんなに言うからついでにほだされて」というのが、とっかかりとしては大方のケースだと思います。

しかし、男と女の利害って一致しないものです。「ああ、また会いたいわ」なんてうっかりつぶやいていると、同じ頃にあっちは別の新しい女を口説いている。最新の女がつねに最高の女なのだから、どんな理屈も通じません。もうアンタ、人間じゃない。

歴史に残る「最悪の」女たらしといえば、モーツァルトのオペラの主人公、ドン・ジョヴァンニさんをおいていないでしょう。非情で強欲でつつしみのかけらもないという点で、彼は群を抜いています。「草食男子」とやらが増殖しているらしい21世紀の日本では、超越的とも言える存在です。

彼はいわゆる「千人斬り」を地でいった人で、実在する人物……ジャコモ・カサノヴァ

をモデルにしたとも言われています。

どんだけ彼がたくさんの女性をモノにしたかは、オペラの第一幕で侍従のレポレロが歌う「カタログの歌」で詳らかにされています。

奥さんよおしくお聞きください。

私の旦那の恋の記録がこのカタログです。

イタリアでは640人、ドイツでは230人、

フランスでは100人、トルコじゃ90人、

そしてここスペインでは、1003人の女と寝たのです！

1003ですよ！ 1003!!

ちなみに1003は「mille tre (1000と3)」なので、この部分、レポレロは本当に憎たらしい口調で「ミレツ、トレツ」と歌うんです。しつこく三回もこの数字を言います。それにしても、モーツアルト的世界においては、侍従は女性のカウント係にもなるのでしょうか。電卓をはじめてみると、五カ国で2063人の女性とベッドをともしたこととなります。レポレロさんは続けて「夏にはやせた女を♪ 冬には太った女を♪

若い娘が大好きだけど老婆もOK♪ スカートをはいていればOK♪」と、旦那の嗜好を歌っていますので、女を見る目はだいぶ大雑把なタイプだったと推測されます。

好色男が出現した三つの要因

あらためて素性をご紹介しますと、このドン・ジョヴァンニとはスペイン人の貴族のオッサンです。作曲したモーツアルトはオーストリア人で、台本を書いたダ・ポンテはイタリア人。オペラはイタリア語で書かれています。でも場所はスペインなのです。そしてこのオペラの舞台となった17世紀のスペインは、ドン・ジョヴァンニのような助兵衛オヤジが登場するのには、もってこいの条件がそろっていました。

1.....人口比において、男が少なく極端に女が余っていた

18世紀といえば、ヨーロッパは大航海時代。今がまさに男盛りというスペイン若者衆は、新大陸への冒険に駆り出され、陸に残された女たちは「男が足りな〜い！」と、欲求不満の状態にありました。ドン・ジョヴァンニは貴族で悠々自適の生活を送る身分でしたから、そういうニーズにはとことん応える準備があったわけですね。相手の女性のほうも「ま、いっか」で済ませてもOKな土壌があったのかも知れません。需要と供給のバランス、ですね。

2…………ヨーロッパの啓蒙主義思想が、性の抑圧を解放した

18世紀を代表する啓蒙思想家のジャン・ジャック・ルソーは、なかなかの好色男で、セクシャルな面に変態的な趣味をもっていたことは一部で有名な話ですが、機械文明や自然科学の発達とともに「人間性」への探求が深く行なわれたこの時代、ヨーロッパの人々はかつてないほど解き放たれた性の意識をもつようになりました。ルソーが書いた『告白』などを読んで、「セックスは子作りのためだけに。服を着たままやる」が実践されていた中世から見ると、大した変わりようです。ちなみにルソー、早熟かつ性欲が強いタイプだったらしく、少年時代にレイプ未遂で逮捕されています。

3…………天変地異がヨーロッパのモラルを決壊させた

このオペラが書かれる32年前、ポルトガルのリスボンでは街がほぼ壊滅するほどの大地震が起こりました。1755年に発生したリスボン地震です。津波による死者一人を含む、六万人もの死者が出た大災害は、思想家たちに大きな影響を与えたのです。欧州のインテリ層の間では「勸善懲惡って何?」「この災害も神の意志なのか?」という懐疑論が生まれ、かの文豪ゲーテは「これからは愛欲のために生きよう」と決心したとか。中世的

な信仰心や道徳観といったものが、地震の瓦礫とともに灰同然の価値となった瞬間でした。

そういえば、カタログの歌には、スペインのご近所であるポルトガルの女が一切カウントされていません。さすがにお気の毒で、野獣のドンも手を出さず気になれなかったのでしょうか……。

進歩的でフェアな三種の女性像

とまれ、モーツァルトが友人であるダ・ポンテと『ドン・ジョヴァンニ』のオペラを書くころと思った成り行きには「最高にモダンで現代の時代精神をシンボライズした人物を描いちゃおう」という動機があったはずで。

モーツァルトとダ・ポンテはほかに『フィガロの結婚』と『コシ・ファン・トゥツテ』を書き、それらはダ・ポンテ三部作と呼ばれていたりしますが、この三作に共通しているのは、恋愛のポストモダンの状況が描かれているということです。つまり、すべてのドラマが終わってしまったあとの、冗談のような恋の遊戯が繰り広げられている。女というのは「スカートをはいた生き物」で、男とはそれをしつこく追いかける生き物……モーツァルトはそんなふうに「恋」を要約します。こんな突き抜けたものが18世紀に存在していた

ことが、既に驚きです。男と女、いくところまでいくと、こんなびっくりするような景色が見えてくるんだねえ」と、肝をつぶしかけてしまいます。

モーツァルトは、「人間性」というものに対して驚くほどフェアで進歩的な考えをもっていた芸術家ですので、今でいうフェミニストでもあったと思います。なので、オペラでは女たらしである主人公を責め、対立する人物が必要となってくる。「ドン・ジョヴァンニ」では、彼に関係する三人の女性が、ドンの「悪」に対して「善」を主張する役を演じます。それは女性が宿命的に抱える三つの感情を体現していたりもします。

1………ドンナ・アンナと「哀しみ」

暗闇の中でドンにレイプされそうになり、そのときかばってくれた父親をドンに殺されてしまう美女です。そんな目に遭いながらもドンは表向きには知人ということになっているのもスゴイ。父親を失った悲しみとドンへの疑惑を長尺のアリアで歌いあげます。

2………ツェルリーナと「迷い」

恋人マゼットとの結婚を控えた若い娘で、ドンが最も性的に刺激されるタイプです。彼

女を誘惑しようとドンが歌うセレナーデは、まるで昆虫の求愛ダンスのようです。何度聞いても歯が浮きます。若く生命力に溢れたツェルリーナは、一瞬ドンの手練手管にハマリそうになりますが、「やっぱり彼氏が一番」と正しい道を行います。

3………ドンナ・エルヴィーラと「怒り」

このオペラに登場する女性の中でも、最も私が感情移入してしまう女性です。彼女だけが、真剣にドン・ジョヴァンニを愛しているのに、ドンは逃げて、かわりに変装をした侍従のレポレロが彼女とことに及んでしまいます。「こんなに憎たらしいのに、こんなに愛している」とドンへの矛盾した想いを歌うエルヴィーラのアリアは本当に素晴らしい。聴いていると、全身が総毛立っ想いがします。女たらしの深刻な被害にあったことのある方なら、みんなこの女性の味方をしたいと思うはずですよ。

これら三人の女性は、実に生き生きと、まるで実在する人物であるかのように描かれていて、特にフラフラとドンの誘惑に引っ掛かりそうになる尻軽の新婦ツェルリーナと、罵詈雑言の限りを尽くしてドンをののしるドンナ・エルヴィーラには、オペラにありがちな「女性の理想化」が全く行なわれていません。ここがモーツァルトのすごいところで、舞